マイケル・ポランニーの「暗黙知」　－元祖「暗黙知」を学ぶ－

マイケル・ポランニーは、ハンガリー出身の化学者だった人です。ノーベル賞候補と目されていましたが、1949年、50歳半ばで突然、社会科学に転向しました。それから18年かけて著した本が『The Tacit Dimension』で、日本では『暗黙知の次元』と訳されているものです。

「暗黙知」は、野中郁次郎さんが、1996年に、SECIモデルを提唱したときによく用いたもので、野中さんがイノベーションに関する本を出して以来広く認識されるようになった概念だと思います。

元祖「暗黙知」のポランニーの「暗黙知」の定義は、『暗黙知の次元』の第1章に書かれてあります。この本は哲学の領域のものですので、難解なのですが、事例を読むとわかりやすくなります。最初に出てくる事例が「顔の認識」で、下記のセンテンスで暗黙知が理解できます。

「ある人の顔を知っているとき、私たちはその顔を千人、いや百万人の中からでも見分けることができる。しかし、どのようにして自分が知っている顔を見分けるのかわからない」

つまり、*私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる*、というのがポランニーの暗黙知です。

顔の認知をはじめとして、暗黙知の一般化が展開されています。

「暗黙知の機能的構造（functional structure）」：私たちは顔の諸部分から顔に向かって注意を払っていくのであり、それゆえ、諸部分については明確に述べることができなくなってしまうらしい。

「現象的構造（phenominal structure）」：A（＝近位項）からB（＝遠位項）に向かって注意を移し、Bの様相の中にAを感知する。

「存在論的な側面（ontological aspect）」：暗黙的認識とは、二つの条件の間に意味深長な関係を樹立するものであり、そうした二つの条件が相俟って構成する包括的存在（comprehensive entity）を理解することだ。

こうした説明が続きます。

「暗黙知の機能的構造」「現象的構造」「存在論的な側面」とだんだん難しくなっていきますが、最初の「顔の認知の例」を認識しておけば、ポランニーの暗黙知を理解したと言っていいように思います。

(M.S.)